



心理学における欲求概念の再検討のための序説

著者	待田 昌二
著者別名	MACHIDA Shoji
雑誌名	研究紀要．人文科学・自然科学篇
巻	47
ページ	79-96
発行年	2006-03-10
URL	http://doi.org/10.14946/00001539



心理学における欲求概念の 再検討のための序説

待 田 昌 二

1. 欲求を再検討する必要性

社会主義的経済体制の国家も資本主義的（自由主義）経済システムを取り入れるようになり、グローバル化という言葉が示すように世界規模で資本主義経済体制への流れが進んでいる。日本は明治以降基本的には資本主義的経済体制であったが、国家による統制・規制が強い特殊な経済メカニズムであるようにも語られてきた。しかしその日本においても、規制や統制を緩和し、できるだけ市場メカニズムに任せる動きが進んでいる。このような流れの中、経済学者の佐伯啓思は資本主義とその意味を再考した上で「資本主義とは企業活動の資本投資による無限の経済の拡張運動」と定義し、さらに「企業がマーケティングを行い、新製品を導入し、事業を拡張しようとするのは利潤を得られると期待できるためだ。しかし、利潤は自動的に発生するものではない。利潤が発生するためにはまず売れなければならない。だから企業が事業を拡張しようとするその先には、人々の欲望の拡張がなければならない。」とし「資本主義とは、人々の欲望を拡張し、それに対して物的な（あるいは商品という）かたちをたえずあたえてゆく運動だといってよかろう。」（佐伯，1993 p.74）と述べている。佐伯は2冊の著書にわたって、資本主義を欲望の拡張という視点から論じている（佐伯，1993，2000）。佐伯のように正面から本格的に論じることがは必ずしも多くないが、現在の経済体制が欲望や欲求を拡張するものであるという発言は日常的なものであると言っても良いだろう。

日本を含む先進諸国における経済は、生産する側の能力により規定されているというより、消費者の欲求に応える形で生産されるという側面が大きい。また、多くの人間にとって物やサービスの購買が生活において重要な位置を占め

ている。このような点から、現代の社会を特徴付けるのが消費社会という言葉であるのは当然といえるだろう。佐伯（1993）が述べるように、現代の消費社会は消費者が自由に自分の好みのものを選択するシステムでもなく、企業が宣伝と販売力によって消費者に強引にモノを売りつけることだけで説明できるものではない。佐伯は、「企業と消費者の共犯になるトータルな運動なのである。その両者が結合して欲望のフロンティアを拡張してゆこうとする運動なのである。」(p.74)と述べている。

一方、欲望や欲求の拡張は現代社会の大きな問題の一つとして捉えられている。これは、マスコミにおいて頻繁に言及される点であるが、ここでは心の問題を扱う専門職である精神科医の発言を紹介しておく。町沢（2000）は「消費社会ではモノが豊富に作られます。それは多くの人に買ってもらえなければ、多くの会社や店は潰れてしまいますから、モノを買わせるためのコマーシャルや広告がどんどん作られ、私たちの購買意欲をそそっています。」(p.123)として、そのような消費社会がつまるところ境界性人格障害を生み出し、また、いくつかの凶悪事件は「成熟した消費社会の中で過保護に育ち、自分の欲望や衝動をコントロールできなくなった人間が破滅した典型といえます。」(p.125)と述べている。これは、内容の当否はともかく、典型的な発言と言えるのではないだろうか。また、現代社会の問題点を簡潔にまとめている信田（2000）を引用しておく。信田はアルコール依存症のメカニズムを一般向けに説明していく中で、アルコール問題は資本主義の勃興発展とともに深刻化していったと述べ、さらに消費社会におけるセルフコントロールについて「資本主義は物の大量生産を可能にした。物が溢れ、消費が喚起されることで資本主義経済は発展していく。人には有り余る物に囲まれながら、欲望が絶えず喚起されながらも決して欲望のままに行動しないというセルフコントロールが何より要求される。たえざる自己点検、自己観察する自己、いわゆる『再帰的自己』の形成である。とすれば、人間が長い歴史を通して一貫して望んできた、物が溢れる『豊かさ』こそがセルフコントロールを要求していくことになる。この困難さを近代に生きる人々は背負っているのだ。」(pp.152-153)と述べている。

現代の日本では経済活動の国や自治体による規制・統制は撤廃し、国や自治

体によるサービスもできるだけ市場メカニズムに委ねる流れが強まっている。市場メカニズムとは、すなわち、生産・販売者側による消費者の欲求の掘り起こし・創造と消費者が欲求を満たしてくれる商品やサービスを求めつづけること、である。しかし一方で、欲求の拡張が憂えられコントロールの必要性が叫ばれるという矛盾した状況にある。この矛盾した状況を考えていくためには、自明なものであるかのように扱われそれ自体の議論が不足している欲望・欲求とは何かを考えることが必要である。

2. 心理学は欲望・欲求をどのように捉えているか

欲求・欲望が人間心理を表す言葉であることを思えば、欲求・欲望がどのような存在であるのか説明することは心理学に期待されるべきことだろう。しかし、佐伯は欲望についての考察において、心理学者による説明としてはマズロー（Maslow, A.H.）の欲求階層説（佐伯は欲望段階説と呼んでいる）を挙げながらも、あまり納得できない説としている。むしろ、哲学者であるジンメル（Simmel, G.）やジラルド（Girard, R.）の欲望論の説明に多くを割いている。これは、佐伯が心理学をあまり知らないためだろうか、あるいは心理学による欲求・欲望の説明に見るべきものが無かったためだろうか。

そこでまず、現在の日本の心理学において欲望・欲求がどのように捉えられているかを、心理学辞典及び心理学概論書によって見ていく。辞典及び概論書は多数あるが、本論では主に以下の5冊の記述について検討していく。日本の心理学者による本格的な心理学辞典としては最も新しい有斐閣版心理学辞典（中島他，1999）、200頁から300頁程度が一般的な大学生向け心理学概論書（テキスト）の中でも異例の大部（592頁）であり心理学系の学生向けの最新の概論書一つ（無藤・森・遠藤・玉瀬，2004）、版を重ねており影響力の大きいと思われる大学生向け心理学概論書の最新改訂版（今田・賀集・宮田，2003；鹿取・杉本，2004）である。加えて、心理学全般を対象にテーマごとに解説を掲載しているハンドブック（中島・繁樹・箱田，2005）を取り上げる。これは30年以上にわたって心理学系大学生・大学院生のための代表的な参考図書の一つであったハンドブックの新版である。

日常的に使われている人の心理を表す言葉が、心理学の学問的文脈では使われていないかあるいは異なる意味で使われていることは多いが、欲望という語はその代表的な例であろう。例えば、有斐閣版心理学辞典では欲望 (desire) は見出し語であるが、「何らかの目標を得ようとする際の内的状態。要求ないし欲求とはほぼ同義の用語であるが、この状態が無意識的なものではなく、意識されていることを強調する場合に用いられることがある。」としか説明おらず、内容の解説は「欲求 (need)」においてなされている。また、無藤他 (2004)、今田他 (2003)、鹿取・杉本 (2004)、中島他 (2005) では欲望という語は事項索引にない。このように欲望という語は現在の心理学では専門用語としてほとんど使用されていないので、以下の論議では欲求という語のみを用いる。

欲求という語は心理学において「行動を駆り立てられる過程 (動機づけ) を表す言葉の一つで、行動を発現させる内的状態をいう。」(有斐閣版心理学辞典) や「人の内部にあって、人の行動を引き起こすもの」(無藤他, 2004 p.192) と説明されており、日常的に使う意味と大きな差は無いといえるのではないだろうか。ただ心理学においては、欲求という語が何かをしたいという心理を説明するための中心概念とは言えない。何かをしたいという気持ちになることを詳細に見ていけば、人の内部から出てくるだけでなく、外部にある刺激の影響を受けるとともに、認知、学習、情動といった様々な心的概念が関係していると考えられるためである。例えば、行動の生起をできるだけ経験による行動の変容、すなわち学習で説明しようとする学習心理学においては欲求というような概念を用いずに、できるだけ行動の生起を学習の問題に還元して説明しようとする (加川, 1997)。このように立場による違いがあるとは言え、心理学では一般的に「行動を一定の方向に向けて生起させ、持続させる過程」(有斐閣版心理学辞典) を捉える語として動機づけ (motivation) が用いられている。そのため、欲求という語は最近の大学生向け心理学教科書の章立てにおいて独立していることはほとんどなく「動機づけ」または動機づけという語を含む章題のなかで紹介されている。

心理学の概論書において動機づけを含む章がどのような構成になっているかを見ていく。無藤他 (2004) では全24章のうちの一つの章として「動機づけ」

が置かれている。彼らは、「人の内部にあって、人の行動を引き起こすものを欲求または動因という。欲求の中でも飢えや渇きによるものや、睡眠、排泄などの生理的欲求は、ある程度誰にも共通しているものであり、人間にとってきわめて基本的な欲求である。」(p. 192) とし、生理的欲求は一次的欲求とも呼ばれることと一次的欲求が満たされることによって生じる心理社会的な二次的欲求があると述べている。そして、マズローの欲求階層説を紹介し、欲求階層説の枠組みに沿いながら低次から高次へと様々な欲求を紹介し、最後に自己実現の欲求を紹介している。

今田他(2003)では全12章の一つとして「動機づけ」が置かれている。動機を、正常に生きていくためには充足されなければならない生得的で個体差が無い基本的動機と、基本的動機を土台にしてその上に経験を通して獲得される派生的動機に分け、それぞれをさらに分類してより詳しく説明している。そして、章の最後に動機相互間の関係の説明としてマズローの欲求階層説(今田他は、動機のピラミッドと呼んでいる)を説明して締めくくっている。

鹿取・杉本(2004)では全10章の一つとして「動機づけ・情動」という章が設けられており、基本的な動機づけとして生存にとって不可欠な食の動機づけと種族維持にとって不可欠な性の動機づけについて述べることから始まっている。そして基本的情動について述べた後、親和動機づけ、活動と探索の動機づけ、達成と自己実現の動機づけの順で紹介されている。そして、自己実現の動機づけの項においてマズローの考え方が紹介されている。

中島他(2005)は全14章からなり「感情・動機づけ」の章が設けられている。大学での講義での使用を想定した心理学概論書とは異なり、試験での論述問題のような形式の質問を設定し、その質問に答える形で心理学の概念を説明している。動機づけ・欲求については「動機づけの概念」「動機づけ研究の歴史」「一次的欲求」「二次的欲求とその獲得」など11の見出しで解説され、「自己実現の理論」としてマズローの欲求階層説が紹介されている。

今田他(2003)は上記の章において欲求という語は用いていず、動機という語を用いている。鹿取・杉本(2004)もまた欲求という語は用いておらず、動機づけまたは要求という語に置き換えている。しかし、無藤他(2004)、中島他

(2005) でマズローの自己実現の欲求と呼ばれているものが、自己実現の動機、自己実現の動機づけとそれぞれ置き換えられていることから分かるように、語が指し示す内容にはほとんど差が無い。また、取り上げられている欲求の種類や欲求以外の概念との関連性の説明は多少異なるものの、食や性の欲求（動機）の生理学的仕組みの説明から始まり達成の欲求、自己実現の欲求へと進むという流れは共通している。

このように見ていくとマズローの欲求階層説は最近の心理学概論書の動機づけの章においてほとんど必ず取り上げられており、なおかついくつかの概論書においては様々な種類の人間の動機づけを説明する代表的な理論として扱われている。このような現状を考えれば、上述したように佐伯が心理学における代表的な考え方としてマズローの欲求階層説を挙げたことは理解できることである。しかし、マズローの欲求階層説は約50年前に提出されている。その後マズローは自身の考えを発展させ“Motivation and personality”にまとめているが、この著書の改訂版でさえ30年以上前に出版されている。近年の動機づけ研究はどうなっているのか。

鹿毛（2004）は、心理学における動機づけ理論は認知、情動、欲求それぞれを重視する3つの理論群に大別できると述べている。そして、そのうちの欲求論的アプローチをわれわれがもつ動機づけに関する素朴概念に近い考え方であり、比較的わかりやすいという長所があるとし、欲求論的アプローチの中で最も著名なものとしてマズローの欲求階層説を挙げている。しかし、今日の研究動向においてはむしろ傍流であると述べている。これは、欲求自体を心理現象として具体的に記述することが困難であり、実験研究の俎上に載りにくい欠点があるためだとしている。鹿毛は、近年の動機づけ研究は認知的アプローチが主流であるとし、これは端的には、自分自身や周囲の人や物、行為に対してわれわれが行う意味づけの過程で生まれる信念（belief）が動機づけを規定すると考える立場だと述べている。彼は、今日の動機づけ理論は精緻化する一方で局所的な説明に終始し小型化する傾向が見られ、動機づけ一般について論じようとするグランドセオリーではないとしている。鹿毛は、動機づけのグランドセオリーと呼べるものとしてフロイト（Freud, S）の力動的パーソナリティー理論、

ハル（Hull, C.L.）の動因理論、マレー（Murray, H.A.）の欲求論、マズローの欲求階層説、アトキンソン（Atkinson, J.W.）の達成動機づけ理論を挙げ、アトキンソンの達成動機づけ理論が最後のグランドセオリーと言えるのかもしれないとしている。アトキンソンの理論でさえ1964年に発表されたものである。

これらグランドセオリーとされているものの内、フロイトの理論とハルの理論は動機づけの研究をもっぱら支配してきたという意見もある（Weiner, 1980）。しかし、彼らの理論は人間の心理や行動そのものを説明しようとしたものであり、動機づけの枠組みに収まるものではない。心理学概論書においては、フロイトの理論は、むしろ、パーソナリティーや心の適応・臨床を扱った章において紹介され、ハルの理論は学習を扱った章で紹介されることが多い。心理学の概論書において、認知や情動は動機づけとは独立した章立てで取り扱われるのが一般的なので、動機づけの章においてはやはり欲求が中心的な話題となる。しかしながら上述したように、近年の基礎系の心理学において欲求は研究対象となることの少ない概念であるため、マレーやマズローが未だに取り上げられているのではないだろうか。人間の基本的欲求は何か検討し、さらに進んで階層性といった欲求の性質について考察していくというより、欲求という概念をできるだけ使わずに人間が行動を起こす過程を説明していこうとしているのが心理学における現状といえるだろう。かといって、心理学から、欲求、欲望に代わる概念が提起され社会に広く受け入れられているわけではないのは、欲望・欲求という語が日常的に使われているだけでなく、現代社会を論じる心理学以外の専門家に使われていることから明らかである。筆者の最終的な目的は心理学と心理学以外のこのギャップを埋め、現代社会特に消費社会における欲求という問題を考える有効な視座を提示することである。しかし、これは簡単なことではない。

多少の用語の違いがあるにしても、欲求に関する記述において一次的欲求（あるいは基本的欲求、基本的動機）と二次的欲求（派生的欲求、派生的動機）という分類が共通して見られる。社会の中で学習のプロセスによって形成される二次的欲求はそれこそ無数にありえるし実際多様である。本論ではまず、一次的欲求と呼ばれている欲求がどのように捉えられているかを見ていきながら

欲求概念の再検討を行なっていきたい。

3. 一次的欲求 (primary need)

欲求という語を用いるかどうかは別にしても、動物が動いて外界に関わろうとする何らかの傾向を生得的に持っていること、特定の刺激に対する生得的な選好があることは行動主義心理学者であっても認めるだろう。そうでないと、オペラント行動自体が起きないし学習も成立しない。動機づけの文脈では、すでに述べたように、内発的で生得的な欲求は一次的欲求、基本的欲求、基本的動機といった語で語られる。これらはほとんど同じ概念であり、一次的欲求と言う用語がもっともよく使われているので、本論においてもこの語を用いる。有斐閣版心理学辞典では見出し語として取り上げられ、「生得的に備わっている基本的欲求のことをさし、経験により形成される二次的欲求と対比される。具体的には、まず飢えや渇きの欲求、排泄や睡眠の欲求のような生理的欲求があげられる。これらの生起は身体内部の状態を一定に維持する仕組みであるホメオスタシスに規定される。ほかに内発性の欲求として、接触の快を求める欲求や刺激を求める欲求、探索や活動の欲求も生得的なもので一次的欲求として位置づけられる。」と記述されている。無藤他 (2004) は「生理的欲求は人の生存に不可欠なものであり、一次的欲求とも呼ばれている。」(p.192) と述べているが、本論では有斐閣版心理学辞典にあるように生理的欲求は一次的欲求の一部として考える。生理的欲求は一次的欲求の主要なものであることはどの概論書においても共通しているので、本論ではまず生理的欲求から検討していきたい。

飲食の欲求あるいは動機づけの説明においては、心理学の概論書においても当然のことながら無意識的に働いている生理学的な仕組みがかなり詳しく述べられている (今田他, 2003、中島他, 2005)。また、心理学の概論書において生理的欲求について説明されるときには必ずといってよいほどホメオスタシス (homeostasis) という語が出てくる。ホメオスタシスは生理学的概念であり、身体内部の状態を一定に維持する身体的な仕組みを指す。例えば、身体の中で糖分が不足した場合には血糖値を一定に保とうとする様々な身体的反応が起きるが、その一つが身体外から糖分を補給しようとする反応であり、食の欲求が生

起することになる。そのため食行動はホメオスタシス性の欲求（無藤他, 2004）あるいはホメオスタシス性の動機づけ（鹿取・杉本, 2004）と呼ばれる。しかし、一次的欲求を生理学的な仕組み及びホメオスタシスという点から説明することには問題がある。

一つには、一部の欲求しか生理学的に説明できないという誤解をもたらしている点である。上記したように有斐閣版心理学辞典では、飢え、渇き、排泄、睡眠を生理的欲求としている、中島他（2005）では一次的欲求の例として摂食、飲水、睡眠を取り上げその生理的メカニズムを中心に解説している。しかし、原理的に言えば、脳神経科学を含む生理的側面から説明できるのが一部の行動や心理に限定されるのではないことは明らかだ。脳神経科学や生理学は、その進歩とともに、これまで説明できないと思われていた心理・行動の仕組みを説明できるようになってきた。飢え、渇き、睡眠などはその生理学的メカニズムが現時点でかなり解明されている欲求といえるに過ぎない。現在は生理的メカニズムに触れられることのほとんどない親和欲求や好奇心もいずれその脳生理学的メカニズムが明らかにされるかもしれない。また、逆の問題点として現在生理学的欲求と呼ばれる欲求を、現在わかっている低次の生理的メカニズムに強く規定されたものとして誤解してしまう危険性がある。上述したように、血糖値を一定に保とうとする生理的メカニズムはかなり詳しくわかっているため心理学概論書の摂食欲求の説明において紹介されることが多い。しかし、摂食行動の生起には社会的・文化的要因など様々な要因が関わっており（今田, 2005）、現在わかっている生理的メカニズムだけでは摂食の欲求の生起を十分に説明できないことは明らかである。

このような混乱は中島他（2005）の記述にも見られる。この本では、一次的欲求については、「一次的欲求（基本的欲求）に分類される欲求を複数示し、それぞれの欲求が発現する際の生理学的要因と心理学的要因について説明せよ。」という質問に答える形で解説している。その中で、摂食の欲求について関わる脳の部位の働きや関連するホルモンについて説明した後に「摂食行動は、生理学的に見ると、脳と抹消の協調作用によって始まり、やがて終了するものであるが、実際にはさまざまな要因が摂食行動を修飾している。習慣化した食事の

時間や、食べ物のにおいや光景、特にその味は摂食行動の調節に重要な役割を果たしており、これには学習・記憶が深く関与する。」(p.262)と述べている。これは摂食行動の記述としては妥当なものであるだろうが、学習が深く関与すると結論付けることは一次的欲求の説明として奇妙であると言わざるを得ない。

ホメオスタシスについては、欲求の生起に影響を与える重要な要因の一つであることには間違いはないが、あくまでも一つの条件に過ぎない。生理的欲求の基本的概念として強調することは誤解を生む。例えば、Buck (1988) は「生存するために最も必須の身体機能—飢え、渇き、性などのホメオスタシス性欲求—は、動機の中でも最も基本的なものであるとよくいわれてきた。」としながらも、「近年明らかになってきたことは、多くの行動がホメオスタシス性動因の充足には関係ないこと、しかも事実ホメオスタシス性動因は、動物や人間の複雑な行動ではさほど重要ではないということである。飢え、渇き、温度調節などの動因は、当然のことながら大変興味深く重要な現象であるが、もはやすべての動機づけ現象の原型とはみなされていない。」(畑山監訳, p.447)と述べている。すなわち、人間のみならず動物においてもホメオスタシスの役割は重要なものではないということになる。

動物行動の研究者である Halliday (1983) は、この点をさらに詳しく論じている。「行動がある生理的変数の調節に役立つとの考えにもとづくモデルがある。摂食行動が血糖値や体重を調節し、摂水行動が体内の水分を調整する、といったかたちである。こうしたモデルは、摂食行動や摂水行動のような諸活動についての理解をいっそう深める上でたいへん有用なモデルとされてきた。しかしそのモデルの運用にあたっては、数多くの制限条項を考慮することが重要である。」(浅野他訳, p.120)と述べ、制限条項として、生理的変数を十分に一定した状態に保つのは行動以外のメカニズムの役割が大きいこと、生理的変数は分単位や時間単位のオーダーではなくもっと長い時間をかけて調節されること、動物には生理機能を調節しない時期があること、などを挙げている。そして、「『恒常性を維持するために必要なあれやこれやの生理的欲求を反映したものが動物の動機づけである』との考えを証明するような実験的根拠はときたま得られているにすぎない。動物の動機づけが生理的欲求に対する自動的調節装置で

あるとの考えは、魅力的であり説得力をもっている。しかしそれは事実によって保証されてはいない。」(浅野他訳, p.122) としている。

このような指摘が既にあるにもかかわらず、心理学概論書における一次的欲求の説明が変わっていないのは、欲求を捉える新しい枠組みがないためだと思われる。

4. 主観的体験としての欲求

上記した問題点を整理して欲求という概念を再検討するためには、動機づけという名のもとに扱う対象が広がりすぎた点に目を向けるべきである。中島他(2005)では「動機づけ (motivation)」について、「行動がどのようなときに起こり、継続し、どの方向を向いているかを説明する時に用いられる、行動の原因全般を示す用語である。」とし、さらに「行動の発現と維持に関わるすべての要因を含んだものと把握できる。」(p.259) とさえ述べている。欧米では Motivationのみを扱った概論書がいくつか出版されている。例えば、Ferguson (2000) は398ページに及ぶが、行動が起きる仕組みが、脳生理的メカニズムはもとより学習、感情、進化、社会、文化、的側面についても解説しており、さながら心理学全般の解説書のようなものである。行動の起きる仕組みを説明するためにはこれは当然のことかもしれない。しかし、動機や欲求という概念をあいまいにしている点は否めない。心理的概念としての欲求とは何かをもう一度見つめなおす必要がある。

一つの捉え方として、欲求や動機といった概念を過渡的な意味を持つにすぎない仲介変数とみなす立場がある。Halliday (1983) は動物の動機づけを解説する中で、空腹や渇きといった諸動因(仲介変数)が複数の刺激入力と複数の行動出力との関係を簡潔に表現するのに役立つ場合にはある程度の説明的価値を持つとしている。ただ、動因を仮定しても入力と出力の関係がうまく説明できない実験結果を示して「仲介変数を導入することにより何かが説明されると考えてはならないのであって、何が説明されるべき現象であるかが明らかにされることだけである。」(浅野他訳, p.96) と述べ、さらに「仲介変数は、せいぜい、まだ知られていない生理的な過程に対する呼称のようなものにすぎない。

動機づけを扱う数多くの研究の究極的な目的は、それらの過程がどのように働いているかを明らかにし理解することであり、それによって、空腹、渇き、動因といった概念は不必要なものになる。」(pp.96-97)とさえ述べている。これは動機づけを行動の生起過程そのものと捉えた場合に当然行き着くべき立場といえるかもしれない。しかし、人間を研究対象とする心理学研究者の多くは空腹や渇きを過渡的な説明概念以上のものとして捉えているのではないだろうか。そこには当然我々の主観的体験の存在がある。

我々が行動を生起する過程の中で、「・・・をしたい」という主観的知覚あるいは何をしたいかという目的を自覚できることがある。しかし、我々が行動するとき上記の主観的知覚や目的の自覚があるとは限らない。それは「無意識にってしまった」や「思わずしてしまった」といった表現に端的に表れている。また、目的の自覚が正確ではないように思えるときもある。例えば、おなかがすいたという自覚のもとで食事をしたが、本当は仕事が嫌になったので逃避のために食事をした、ということもあるかもしれない。精神分析学における合理化や抑圧という概念は欲求の自覚の危うさを示しているものと言える。このような理由もあって、心理学において動機づけという言葉が欲望や欲求という用語にとって代わったと言える。しかし、心理学的概念としての欲求は、主観的知覚や目的の自覚を中心とした概念であるはずだ。意識的知覚と無意識の境界があいまいであり、本人の自覚している感情分類が正確とは限らない点は「感情」にもあてはまるが、主観的体験としての感情があるのは明らかであるし、その主観的体験を中心に心理学的に調査・検討される。欲求という主観的体験をBuck (1988) は次のように述べている。「我々が見たCannon説が意味するところは、動機づけ系の状態が、意識体験の形で認知に反映されるような一種の直接的な体験が存在するということである。この主観的体験は即時的な直接知である。つまり、ちょうど大腦が青い色であるとか梨の味とかを体験する仕方を「知っている」のと同じように、大腦はまた痛み、渇き、性的興奮を体験したり、嬉しさ、怒り、恐れを体験する仕方を「知っている」のである。」(畑山監訳, pp.30-31)。

主観的体験を基準にすえる必要性についてもう少し詳しく考えていくことに

する。行動の生起において「・・・をしたい」という主観的体験が常に伴うものではない。例えば、何かがぶつかりそうになったときとっさに目をつぶる、こけそうになったときにバランスを取る、といった危険を回避するために必要な行動は反射的、無意識的に行うほうが確実である。ホメオスタシスを維持する行動で言えば、体温が低下したときの震えは無意識的に起こる反射反応である。我々が行う行動にはこういった反射が多く含まれている。意識的に行う飲食においても、咀嚼や嚥下などは反射的行動が含まれているし、コントロールしようと思えば意識的にコントロールできる行動でもほぼ自動的に行っている場合は多い。「・・・をしたい」という主観的体験を伴わないこれらの行動の生起過程に「欲求」という心理的概念をあてはめることは、言葉の日常的な意味としてはもちろんのこと、構成概念や仲介変数としても意味がない場合がある。しかし、次に見るように心理学辞典や心理学概論書ではこの点が十分に捉えきれていない。

有斐閣版心理学辞典の項目「欲求」において、一次的欲求の一つとして呼吸が挙げられている。また、鹿取・杉本（2004）ではホメオスタシス性の動機づけの一つとして空気（酸素）への動機づけが挙げられている。運動して体内に酸素が不足すれば呼吸が速くなり多量の酸素を取り入れようとする。これは体内の糖分が不足したときに不足分を摂取しようとすると同じように捉えているためだろう。しかし、体内の酸素が不足したときに、食欲と同様に空気を欲する欲求を持ち、その結果として呼吸を早めるだろうか。呼吸を早めることは意識的なコントロールの下にも行なえるが、意識的なコントロール下ではなく普通に運動で呼吸が速くなった場合、いくら注意を向けても呼吸が速くなる直前に「呼吸を早めたい」という気持ちを見出すことはできないのではないだろうか。むしろ、呼吸が速くなったと同時に息が苦しいと自覚できるということではないだろうか。また、意識可能かどうかを問題にしない仲介変数として欲求を捉える場合でも、運動に伴い呼吸が速くなるという行動の生起過程は比較的単純で定型的なものであり、心理学的な仲介変数を仮定する必要があるとは思えない。

ここでもやはり確認しておくべきことは、行動の生起する過程を生理学的に

説明することは、行動を説明しようとする観点の問題であるということだ。生理学的に説明できる欲求と説明できない欲求があるというわけではない。また、上述したように中島他（2005）は、一次的欲求の解説において「欲求が発現する際の生理学的要因と心理学的要因について説明せよ。」と問題設定しているが、このような表現も同じ過ちを犯しているように思う。「現在その仕組みがよくわかっていて低次の生理的過程と心理学的概念に対応する高次の生理的過程」といった表現の方が正確なのではないだろうか。問われるべきは、行動の生起過程のどの部分で我々は「・・・したい」という主観的体験を持ちうるのか、あるいは、行動の生起過程のどの部分で仲介変数が必要か、ということであろう。この点を次に考察していきたい。

アメリカにおける代表的な心理学概論書であるAtkinson, Atkinson, Smith, Bem & Nolen-Hoeksema（2000）では「動機づけとは、『行動を発動させ、方向づける条件である』。それは意識的な欲求（食物、飲み物、性的行動への欲求）として体験されている。」（内田監訳, pp.653-654）と、動機づけは意識的な欲求とほぼ同義と述べている。これはここまで紹介してきた動機づけの定義よりもかなり狭い。そして、動機づけに関する説明自体は、「何が動機づけを制御しているのだろうか」と問いかけ、「動機づけの原因は、脳内や身体の生理的な活動から、文化や周囲の者との社会的な相互作用まで含み、多様である。」として、渇き、空腹、性的欲求といった基本的動機の原因について脳から文化まで幅広く述べている。意識的な体験とそれを引き起こす原因を分けているという点で、上記で紹介した日本の心理学概論書よりも考えが整理されているように思う。欲求という構成概念自体の意味についてはあまり言及していないが、ホメオスタシスについての以下の記述が参考になる。「発汗や震えのような身体的な調節作用によって脳も一定の状態に保てるのである。これらの身体的な反射である発汗によって体を冷し、筋運動によって温めるのである。不快なほど暑いと思ったときに心理的な反応が動き始める。たとえば、服を脱いだり、冷たい飲み物を飲んだり、日陰を探したりする。」（内田監訳, pp.662）

上述してきた日本の心理学辞典や概論書の一次的欲求の記述にならえば、反射や自律神経系の反応から意識的な対応までどれも体温を一定に保つための反

応であるので、体温保持の欲求といった名称が与えられても不思議はないし実際に体温調節が一次的欲求の例として挙げられることもある。代表的な一次的欲求である渇きにおいても、体内の水分欠乏時には、渇きを感じて水を飲むという反応がおきるだけではなく、腎臓での水分回収や発汗の抑制などの反射的であり当然無意識的反応を伴うからである。このような、意識的無意識的諸反応がまとまって生命維持の目的を果たしている例はいくらでもある。例えば、毒性のある食物を摂取した時には反射的な嘔吐が起きるが、意識的に嘔吐しようとする場合もあるし、不味い味やいつもとは異なる味や感触から飲み込む前に吐き出してしまう時もある。これらは毒物排除欲求と呼べないだろうか。また、病気になった時には身体内で無意識的な様々な免疫反応が起きるだけでなく、身体を動かさずじっとしているといった反応も起きる。食欲はなくなるが、場合によっては薬効のある食物を選ぶこともある。チンパンジーでさえ、病気の時に普段食べない薬効のある植物を摂取することが知られている（ハフマン・小清水・大東，2000）。これら一連の反応に健康保持の欲求といった名称を与えることができるのではないか。このように現在の一次的欲求の定義に従えば、生命維持に関連するすべての行動に「・・・の欲求」という言葉をあてはめてもおかしくはない。しかしながら、実際には摂食や飲水の欲求を中心に述べられる。これらが、頻繁に強く主観的体験を引き起こすからだ。主観的体験に言及することを避けながら暗黙のうちに前提としていると言える。やはり、Atkinson et al.のように、意識的な欲求として体験される、と定義することから出発すべきである。

しかしながら、Atkinson et al.は主観的体験そのものについてはほとんど説明していない。体温調節の例においても「心理的な反応」をこれ以上詳しく説明していないが、暑さ寒さが意識に上った時に起こる反応といえる。体温保持の際に、服を脱ぐ、冷たい飲み物を飲む、日陰を探す、といった例が示されていた。こういった反応の特徴は、定型的な結びつきではなく複数の可能性から選ぶことと随意筋の動きを必要とすることである。欲求という心理は全ての動物が持っているようには思えない。例えば、昆虫は反射的な行動の積み重ねでかなり複雑な行動を行う。欲求を感じるということ自体進化の過程で何らかの必

要性により生まれた心的過程と考えられる。欲求が起きるのは自動的反射的な反応では対処できない高次の結びつきを必要とする場合だろう。

5. 今後の検討課題

本論考の結論として言いたいことは、心理学概論書が動機づけ特に一次的欲求の説明でまず取り上げるべきは、現在のように欲求の種類を並べたてることではなく、欲求として我々が意識可能なのは行動の生起過程の一部に過ぎないということ、欲求は人間が元々生活していた環境の中で有効に働くように進化してきたということである。例えば、我々は健康維持に必要な食物すべてに同じように食べたいという欲求を感じる訳ではない。もともと人間が進化してきた環境で、複雑な運動を用いて摂取するものにたいして欲求を感じるようになったと推測される。

ここまでの議論を踏まえて、現代社会における欲求の拡張とコントロールという問題に立ち戻る。心理学概論書では一次的欲求は生命維持のための合理的なシステムとして解説される。しかし、一方で我々は欲するままに食べることはむしろ健康を害することだと捉えている。このようなずれは摂食の欲求だけに限られることなく、欲求全般にあてはまる可能性のあることである。欲求のコントロールの必要性は、現代の消費社会や市場原理に基本的な疑義を投げかける重要な問題である。しかしこれまでは、文化、思想、教育の問題という捉えられ方が一般的であり、心理学的に取り上げられることがほとんどなかったように思う。これは、欲求として意識するまたは場合によって意識可能なのは行動の生起過程の一部である、ということによって理解できると考えられる。意識とその働きの理解は、非常に大きく困難な問題であるが、心理学や脳科学において取り組まれつつある。欲求概念の再検討においても、意識そのものの研究と結びつけた論考が今後必要である。また、現代社会において欲求のコントロールの必要性が生じたことは、誤った学習によるだけでなく、一次的欲求の働きと現代社会の環境のずれにより生じた内在的な原因にもよる。その原因については、欲求の働きを進化論的視点で捉えなおすことで理解できると考えられる。

本論はほぼ問題提起に終始してしまったが、今後は、より具体的に欲求を取り上げながら、その生起過程における主観的体験を吟味し、その進化的な働きを検討していく必要があると考えている。

(本学助教授)

引用文献

- Atkinson, R.L., R.C. Atkinson, E.E. Smith, D.J. Bem, & S. Nolen-Hoeksema 2000 *Hilgard's introduction to psychology: 13th ed.* Wadsworth Pub. Co. (内田一成監訳 2002 ヒルガードの心理学 プレーン出版)
- Buck, R., 1988 *Human motivation and emotion, 2nd ed.* John Wiley & Sons (畑山俊輝監訳 2002 感情の社会生理心理学 金子書房)
- Ferguson, E.D., 2000 *Motivation: a biosocial and cognitive integration of motivation and emotion.* Oxford University Pr.
- Halliday, T.R., 1983 Motivation. In T.R. Halliday & P.J.B. Slater (eds.) *Animal Behaviour, Volume 1: causes and effects.* Blackwell Scientific Publications (浅野俊男・長谷川芳典・藤田和生訳 1998 動物コミュニケーション 西村書店 pp.93-122)
- ハフマン, A. マイク・小清水弘一・大東肇 2000 サルの薬膳料理 杉山幸丸 編著 霊長類生態学 京都大学学術出版会 pp.85-108.
- 今田寛・宮田洋・賀集寛 2003 心理学の基礎三訂版 培風館
- 今田純雄編 2005 食べることの心理学 有斐閣
- 加川元通 1997 動機づけ概念の発生 日本行動科学学会編 動機づけの基礎と実際 川島書店 pp.3-8
- 鹿取廣人・杉本敏夫 2004 心理学 第2版 東京大学出版会
- 鹿毛雅治 2004 「動機づけ研究」へのいざない 上淵寿編著 動機づけ研究の最前線 北大路書房 pp.1-29
- 町沢静夫 2000 危ない少年 講談社
- 無藤隆・森敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治 2004 心理学 有斐閣
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司編

- 1999 心理学辞典 有斐閣
- 中島義明・繁樹算男・箱田裕司編 2005 新・心理学の基礎知識 有斐閣
- 信田さよ子 2000 依存症 文藝春秋
- 佐伯啓思 1993 「欲望」と資本主義 講談社
- 佐伯啓思 2000 貨幣・欲望・資本主義 新書館
- Weiner, B. 1980 *Human motivation* Holt, Rinehart & Winston (林保・宮本美沙子監訳 1989 ヒューマン・モチベーション 金子書房)